

On the meaning of tense as a style parameter in Japanese narratives

Kayoko Koiwai

「語り」のテキストにおける文体特徴

—日本語の童話の時制分析の試み—

古岩井嘉蓉子

1.0.

「語り」のテキスト（小説、説話、物語等）の時制についての最近の研究では池上嘉彦氏の「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」（『語り—文化のナラトロジー』記号学研究6, 1986日本記号学会編）、英語では「歴史的現在時制」（historical present）を扱った論文“The Conversational Historical Present Alternation” by N.Wolfson (*Language*, Vol. 55, No. 1 (1979))や“Tense Variation in Narration” by D. Schiffrin (*Language*, Vol. 57, No. 1 (1981))そして「語り」の内容をとり入れた解釈をする立場をとる論文“Tense and Time Reference: from meaning to interpretation in the chronological structure of a text” by B. Comrie (*Journal of Literary Semantics* XV/1 (1986) 及び “Aspect and foregrounding in discourse” by P. Hopper (*Syntax and Semantics*, Vol 12: Discourse and Syntax) 等種々な研究がある。本稿では、従来の研究とは観点をかえて、松谷みよ子の童話『赤ちゃんのお部屋』『朝鮮の子』『黒猫四代その一』を資料として、時制について「語

この小論は日本文体論協会第52回大会（神戸市外国語大学）に於て昭和62年11月14日に発表されたものである。

り」のテキストの文体特徴という点から考察を進めていく。

「語り」のテキストを読むのに読者（聴き手）は、重要な情報の一つとして、その中から各々の出来事の時間的構造（chronological structure）を引き出そうと努めるのが「語り」のテキストに対する読者の態度である。一方、多くの言語では「語り」のテキストでの出来事の時間的關係を表わすのに、出来事の時間（event time）に対応すると考えられる文法範疇である時制を用いる。時制という一つの文法範疇は出来事が実際に起きた時間を簡単に表現することができると思われる傾向がある。すなわち「語り」のテキストの時間的構造を理解するには時制の意味だけで充分であるという考え方である。しかし「語り」のテキストでは、時制は必ずしも空間的時間と一致するものでなく、むしろ語り手（書き手）の心理や主観を反映しているような印象を受けるのである。何年も前に関係するような出来事を一時間前に起った出来事よりも語り手の現在に近い時制で表わすことも可能であるし、又意図的に出来事が実際に生じた時間とそれに対応すべき時制を用いないで表わすこともできるし、それを読み手（聴き手）は、その一連の出来事に対して時間的に正しく順序づけられるのは、時制は空間的時間の概念と同時に抽象的、心理的意味をその背後に認識できるのは、読み手が動詞の時制だけを手懸りとして時間的構造（chronological structure）を理解してはいないということである。動詞の相、語彙の意味とその構造、談話（discourse）の形式そして言語外の知識を取り入れて一連の時間帯における行為、出来事の順序づけを行うのではないかと考えることができる。こうして読者は種々の情報を判断しながら出来事の時間的順序づけにより「語り」のテキストを理解するだろう。

1.1.

池上嘉彦氏の論文（記号学研究 6, 1986）で指摘されている事柄の中から、日本語の「語り」について次のような有益な点が挙げられる。

日本語の「語り」の中における複数のテキストの中で過去形と交替して用いられる現在形の使用に関していくつかの特徴を、ここに挙げると

- (1) 状態を表わす動詞の方が行為ないし出来事を表わす動詞よりも現在形になり易いのではないかということ。又形容詞と否定の「ナイ」も好んで現在形が使われる。

かおはものすごくあつい
 わたしのつくえがもえている
 あのねちょうももえている
 わたしのふくもたからものも
 みんなもえている
 なみだがいっぱいでてきてとまらへん

このライオン仕掛けられてあった罠にひっかかった。丈夫な網の罠で、いかにあばれても脱出できない。もがきつづけてライオンは体力を使いつくし、いまや運命もこれまでと思われた。

- (2) 直接話法に伴う「言う」またはそれに相当する動詞は現在形で用いられることが古文ではかなり多い。

五人の人々も、「よき事なり」といへば、翁入りていふ。赫映姫、石作皇子には、「……」といふ。車持皇子には、「……」といふ。

- (3) 敬語現表として機能する動詞は、古文の「語り」のテキストでは現在形である。

.... 御使に賜はす。.... 仰せ給ふ。

.... 教えさせ給ふ。.... 仰せ給ふ。

- (4) 過去の出来事を述べるのに現在への関連性を暗示するような語り方がある。例えば古文の「ケリ」、現代語の「ノデアル、ノダ」という表現は過去形にも連結させることができる。

その冬はアリたちにとっても楽しいものとなった。ジュークボックスがそなえつけられたようなものなのだ。

- (5) 「語り」の部分と語り手による「評価」との区別があまり明確でない傾向がある。「評価」の部分は現在形が用いられる。

.... 手に打入れて家に持ちて来ぬ。妻の姫に預けて養はす。美しきこと限りなし。といと幼ければ籠に入れて養ふ

以上、池上氏は彼の論文の中で大きく5つの特徴が日本語の「語り」の中に目立っているとして挙げている。更に、過去時制と「歴史的現在時制」の交替が日本語の「語り」のテキストの中に多くあるという事実について、もっと一般化した説明を次の様に与えている。

日本語の「語り」のテキストにおいて〈状態〉と〈否定〉と〈敬語〉という全く異なる範疇の間で「歴史的現在」の使用の頻度数が多いのは、日本語の動詞自体の他動詞（transitivity—動詞がある対象に向けられた行為を表わしている場合に、その行為がその対象にどの程度影響するかということ）の弱さという点に注目することによって、これら3つの範疇の中に共通項をとり出している。動詞の他動性の弱さということが日本語の「語り」では、現在時制を多くとる結果に結びつくとしている⁽¹⁾。更に他動性の低さは、本来の「語り」（event time に関すること）と評価（speech time に関すること）との区別を曖昧にさせてしまうのである。又他動性の低さは現在時制への傾向を強めることによって語り手の主観的な評価を「語り」の中に導びき易くしてしまうということを指摘している。主たる要因である動詞の他動性の低さ、そして客観的な「語り」の中への主観的な「評価」の混入の容易さの他に、日本語文のコンテキスト依存性の高さや現場感の演出といった要因を述べ、「語り」のテキストの現在形の頻用を種々な原因の絡み合いとして結んでいるのである。

以上、「語り」の時制とりわけ過去形と現在形の交替の要因を探るのに動詞の意味的構造から追求し見事な説明を与えているので日本語の「語り」全般についての「歴史的現在時制」への傾向は繰り返す必要はない。

2.

そこで、この研究の試みでは過去形と現在形の交替の本質を調べるのではなくて、ある特定の日本語の「語り」のテキストの交替が、どのように作家の文体を特徴づけているかを松谷みよ子の創作童話を中心に観察していく。

日本語の「語り」では子供の作文から始まって童話、小説に至るまで、過去の出来事を通例、過去時制で表現するが「歴史的現在」を用いる頻度数も高いと指摘されている⁽²⁾。過去に起った出来事を現在形で表わす用法を「歴史的現在時制」（historical present）と呼び、過去の出来事をやや劇的に述べるのに使われる用法とされている。しかし、日本語のこれら2つの

時制の交替では、すべての現在時制が必ずしも従来の解釈による「歴史的現在」という考え方（過去の出来事を生き生きと劇的に描写すること）によって解決されるというわけではないのは、いくつかの例文をみればわかる。

(1)

ぼくは内^{ない}ちゃんと、じゃりあなにつりにいった。

夕日にそまって、じゃりあなの水は美しい。

青い光がてまえを、そのむこうを緑と赤の色がゆらゆらゆれている。波が立って色をゆらしている。色はみだれていても、青、緑、赤のじゅんじょはわからない。ちょうど、にじのようになっている。この下にいるさかなに見せてやりたいようながめだ。

むらさき色の水がゆれ、口ばそがピシャッとはねる。力強く夕日によびかけるようにはねる。無数の円がひろがる。ウキをゆらす。

つりをわすれて、ぼくはながめていた。

ウキがゆれて円がひろがる。ウキがしずんで、さかながつれる。

「きれいだな。」

内^{ない}ちゃんが、ふっといった。

「平和だな。」

と、となりにいたおじさんがいった。

緑色がゆれ、キラキラ光りながら、コイがつれた。

夕日 『小学生作文の本 六年生』

吉田瑞穂編著 小峰書店

(2)

くも 蜘蛛となめくちと狸^{たぬき}

くも 蜘蛛と、銀色のなめくちとそれから顔を洗ったことのない狸^{たぬき}とはみんな立派な選手でした。

けれども一体何の選手だったのか私はよく知りません。

やまねこ 山猪が申しましたが三人はそれはそれは実に本気の競争をしてみるのださうです。

一体何の競争をしてみたのか、私は三人がならんでかける所も

見ませんし学校の試験で一番二番三番ときめられたことも聞きません。

一体何の競争をしてみたのでせう、蜘蛛は手も足も赤くて長く、胸には「ナンペ」と書いた蜘蛛文字マークをつけてみましたしなめくちはいつも銀いろのゴムの靴をはいてみました。又狸は少しこはれてはみましたが運動シャッポをかぶってみました。

けれどもとにかく三人とも死にました。

蜘蛛は蜘蛛暦三千八百年の五月に没くなり銀色のなめくちがその次の年、狸が又その次の年死にました。三人の伝記をすこしよく調べて見ませう。

『宮沢賢治全集』

ちくま文庫

(3)

黒猫四代

その一、一ぴきの猪と、二頭のぞう

「この黒い子猫を、もらってくれないか」

と、絵かきの平井さんにたのまれたのは、わたしたちが結婚して一月とたたない、ある冬の日のことでした。

平井さんのうちは、まったく愉快的な家です。

たった一間のアトリエのまん中にストーブが燃えていて、そのまわりに平井さんや、平井さんの奥さんや、五つになる和子ちゃんがいます。ところがそのまたまわりを、犬だの、猫だの、うさぎだのが走りまわっているのです。そしてそのまわりの檻の中には、さるだの、りすだの、はとだのが、遊んでいました。

そのうちうさぎが、ぴよこたん、ぴよこたん、流しの横のバケツへ水を飲みにいきます。すると猫がまねっこして、また水を飲みにいきます。すると今度は、平井さんがそのバケツから水をくんで、わたしたちに、コーヒーをわかしてくれるのでした。

こんなふうにかわった家でしたが、今度いってみると、また家族がふえて、真っ黒な子猫が走りまわっていました。どこからどこまで石炭のようにつやつやと真っ黒で、ただ目だけが、エメラ

ルドという宝石をはめこんだように美しい緑色です。

『黒い蝶・花びら』

松谷みよ子 講談社文庫

(1)の作文の2行目から9行目までに使用されている現在形は単に過去の出来事を劇的に生き生きとした表現効果だけを狙ったもののようにはみえない。空間的時間を飛び越えて心理的に過去の美しい景色の場面に近づいて行って、語り手は語りかけているようである。(2)の例については、これらの現在形は語り手の意見・評価を述べている箇所である。(3)については、語り手と読者との心理的、空間的距離を少しでも短かくするのに現在形が使用されているように思える。これについては、現在形の項で述べる。

これら3つの例からだけでも「歴史的現在時制」は語りの中で劇的效果を狙った過去時制の単なる代用ではないということは、明らかである。「歴史的現在時制」は過去時制と同じ機能を持つ一方、「語り」又は談話(discourse)の中では、この時制はそれ以上の意味を持っているようである。加えて、N. Wolfson (1979)の論文を本稿のテーマとの関連でみると、次の点を挙げることができる。

- (1) 「歴史的現在時制」の用法については、英語の場合多くの文法家は会話の中における用法について言及しているが、口語と文語、そしてジャンルの違ったテキストの間における「歴史的現在時制」の用法の差といったものにはあまり解れられていない。
- (2) Roman Jakobson は時制の捉え方として二つの場合を考えている。一つは、過去の出来事を起った時間帯で語るには、動詞は過去形又は、その代用として「歴史的現在時制」を用いる。もう一つは、語りの時間帯で起こる事柄(speech event)は、すべて現在形を用いる。だから過去の時点で起った出来事について言及するために用いられる「歴史的現在形」と、今現に語りをしている時点(speech time)に起っているような出来事を伝える現在形との二つは区別されなければならない。「歴史的現在時制」でない現在形は一般的真理、事実、そして意見、批評を述べたり又は、一般に正しいと考えられているようなことを説明したりする時に使われる。
- (3) 「歴史的現在時制」は意味的に無徴(unmarked)というわけではない

が、それ自体には何ら重要性を持っていない。会話においては、重要な出来事に触れる場合は、現在形よりむしろ過去形で表現される。だから談話 (discourse) の中における現在時制と過去時制の交替という点が重要な特徴といえる。

- (4) 「歴史的現在時制」の表面だけをみて、従来の文法学者の説のように、その使用の意義を劇的效果を狙ったものとしてみるのは正しくない。むしろ、過去の出来事について、強調したい場面については、「歴史的現在時制」より過去時制が使われている。
- (5) 過去における行為・行動をいくつかの出来事に区分し、それに焦点を与え、更に、語り手が評価や解釈をするために「歴史的現在時制」が必要となる。
- (6) 過去形と現在形の交替が、「語り」の中における複数のエピソードを区分するのに役立つといっても、その交替は、あくまでも語り手の任意の選択である。

以上が N. Wolfson の論文の中から抜粋してみた日本語の「語り」の中の時制と関係ありそうな箇所の主旨である。これらの主張をふまえて、松谷みよ子の創作童話の「語り」における過去時制と「歴史的現在時制」の交替を文体的な特徴として捉えて、その「語り」の中での機能を分析してみよう。

3.

松谷みよ子の童話を読むと、過去時制と現在時制の交替が極めて頻用されているのに気がつくのである。「語り」のテキストの中の出来事は大抵、過去の時間帯に起ったことであるから、文法範疇からすれば過去時制ということになるはずであるのに、実際には、かなりの数の「歴史的現在時制」との交替によって彼女の「語り」が進められているのである。しかも、これらの「歴史的現在」は、西欧の文法で、しばしば言及されている過去の出来事の叙述に生き生きとした現場感を与える表現形式であるという説明ではすまされないような表現方法が多いことに気づくのである。松谷みよ子の「語り」のテキストにおける交替の例として『赤ちゃんのお部屋』の全文を次に挙げる。

* (星印) は過去進行形を示す。


~~~~~（波線）は過去形を示す。

———（棒線）は現在形を示す。

### 赤ちゃんのお部屋

ひろ子は薄暗くなっていく部屋の中に、ぽつんと\*座っていました。

外には冷たく、からからに乾いた風が、うなり声をあげて\*駆けまわっていました。

部屋のすみからは、気味の悪いお化けが、ケラケラ笑いながら出てくるような気がします。ひろ子はたまらなくこわくなって、隣のゆきちゃんの家にいました。

ゆきちゃんは、お部屋のすみっこにある小さなおふとんのそばで、おもちゃのオルゴールを\*ふっていました。そこには赤ちゃんが寝ているのです。

ロンロンロン、リロリロロン。

おもちゃのオルゴールはかわいい音をたてて鳴り、赤ちゃんの真っ黒な目に、おもちゃの赤や桃色や空色が写って、ロロロとゆれます。

ウクーン、ウクーン。

赤ちゃんはきげんよく、お話をしています。

「ねえ、あたしにもやらして」

ひろ子はふとんのすそから、おずおずといいました。赤ちゃんの小さなこぶしや、ぼうっと赤いほっぺにさわってみたいのです。ロンロンロンとおもちゃをふってあやしたい。

でもゆきちゃんは、うちの赤ちゃんよ、というように、なかなかひろ子にはいじらせてくれません。

ゆきちゃんのうちは狭いけれど、暖かくって、明るくって、おいしい匂いがしています。ゆきちゃんのおかあさんが台所で、コトコトなにかきざんでいる音もきこえます。

気がつくと窓の外は、もう真っ暗なのです。

「いないよ、いないよ、ばあ」

ゆきちゃんがあやします。

「ねえ、あたしにもやらしてえ」

そのとき、がらりと戸があきました。あ、ゆきちゃんのおとうさんだ。

「おとうさあん」

ゆきちゃんが駆けだしていきます。ひろ子は、そのまに、急いでおもちゃをふりました。

ロンロンロン、リロリロリロ。

でも……もうだめです。ゆきちゃんのおとうさんがきました。ひろ子は急いで、部屋のすみっこに逃げました。

「坊や、今日はおとなしかったかい？」

高い高いをされた赤ちゃんは、きゃっきゃと笑いました。

「さあ、ご飯にしましょ」

ゆきちゃんのおかあさんが、お膳を出します。ひろ子は、もう帰らなくてはいけないのに気がつきました。

「さよなら」

「さよなら、またあしたね」

ひろ子は運動ぐつをつっかけて、外に出ました。<sup>こ</sup>木枯らしはどっと、氷のように冷たく、ひろ子にぶつかってきました。ひろ子のうちはまだ真っ暗、おかあさんはお勤めから帰っていません。

「うちも赤ちゃん、いればいいのになあ」

ひろ子はつぶやきました。風はいよいよ冷たく、暗い空は氷のかけらのような星を\*浮かべていました。その下で小さなひろ子はひとりぼっちでした。

ひろ子のおとうさんは、ひろ子がまたおかあさんのおなかの中にいるとき、戦死しました。青い海の底におとうさんは眠っているのよ、おかあさんはいいます。<sup>さんご</sup>珊瑚のあいだを魚たちが虹のように輝きながらひらひら泳いでいるという南の海。

おとうさんは寂しくないのかしら、ひろ子、寂しいなあ、ひろ子は空を見あげました。うちの赤ちゃん、どこかにいないかなあ、赤ちゃんがいれば寂しくないのに……お星さまの中にいないかしら？ ひろ子はそこまで考えて、急いで首をふりました。あんまりお星さまは冷たく凍るように光っていたのです。

赤ちゃんって、どこにいるんだろう、路地から路地へぬけながら、ひろ子は考えました。片足で飛びながら考えました。

「あ、おかあさんにきいてみよう」

ひろ子の顔が、ぱっと明るくなりました。なあんだ、どうして気がつかなかったのだろう。ひろ子の目の前に、むちむちふとった赤ちゃんが笑っています。早く、早くおかあさんにいおう！うちにも赤ちゃん、連れてきて！

「駅におかあさんをむかえにいこうっと」

ひろ子は風にむかって、走りだしました。

木枯らしが窓をゆすっています。

「おかあさん、うちにも赤ちゃん、いるといいなあ、赤ちゃん、連れてきてよう」

泣き疲れた子<sup>やき</sup>山羊のように、ひろ子はさっきから\*くりかえしていました。

「ひろ子、ひとりぼっちでお留守番<sup>るすばん</sup>するの、いやだあ」

わかいおかあさんは、泣きたいようでした。

こんな木枯らしの夜は、おかあさんだって、遠い海の果てまで、おとうさんをさがしにいきたくなるのです。

「おかあさん、うちの赤ちゃん、連れてきてよう、ゆきちゃんちみたい、赤ちゃんがほしいのよう。どうして、お返事してくれないの」

「あのねえ、ひろちゃん」

おかあさんは、ゆっくり話しました。

「だれでもねえ、女の人のかからだの中には、赤ちゃんのお部屋があるの。そこにね、赤ちゃんは眠っているのよ」

「ふうん、赤ちゃんのお部屋？ どんなお部屋？ かわいいお部屋だね、きっと」

「そうよ、真っ赤なビロードをはった、とてもきれいなお部屋よ。そこに赤ちゃんは眠っているの」

「じゃあ、うちの赤ちゃんもねんねしているのね、わあい、女の赤ちゃんかな、男の赤ちゃんかな、ねえ、おかあさん、その赤ちゃんを早く連れてきてよ、早くよう」

ひろ子は喜んでいいました。

でもねえ、赤ちゃん、眠っているんですもの」

「起きなさい、っていえばいいよう」

「起きなさいってね、いえばいいんだけどね」

おかあさんは、いいました。

「それには金色のちょうちょがいなくてはいけないの、そのちょうちょが、赤ちゃんのお部屋まで、ひらひら飛んでいって、赤ちゃんの胸にそっととまると、赤ちゃんは目をさますの。トックン、トックン、そのときはじめて赤ちゃんの命が動きだすのよ。いままで眠っていた赤ちゃんが、おててを動かしたり、あんよを動かしたりするようになるの」

「わかった！　じゃあ金色のちょうちょを連れてくればいいのね。そうしたら赤ちゃんがおめめをさますのね」

「だめなの」

おかあさんのほおに、なみだがつうーとすべりおちました。

「その金色のちょうちょは、死んだおとうさんだけがもっていらっしやるの。だから……」

ひろ子はわかりました。おとうさんが死んでしまったということが、どんなことなのか、よくわかったのです。

ひろ子は、おかあさんがたまにかわいそうになりました。そして立ちあがると、お話の本をかかえてきました。

「おかあさん、うちの、ねんねしている赤ちゃんに、ひろ子、ご本を読んであげるわ」

ひろ子は、高い声で読みはじめました。

「寒い冬がやってきましたので、お山のうさぎたちは……」

おかあさんは、なみだをのみこみながら、ひざによりかかっている、ひろ子の髪を静かになでました。

外は、木枯らしでした。

## I. 過去時制について

B. Comrie (1986) は言語上の項目、例えば語彙項目、文法範疇や文構造等の各々の独立した機能と、これらが絡み合って文脈の中に入れられた場合の解釈との間には明確な区別ができるような言語的な枠組を提案している<sup>(3)</sup>。例えば、語彙自体が持っている意味と文脈の中に入った時のその語彙についての解釈の間には、しばしば大きな差があることは、日常我々が経験するところである。そして、その文脈又は、談話 (discourse) の中で与えられた解釈は、そのテキストあるいは会話の中での内容を示す重要な

意味を持つのであるから、文脈の制限を受けない語彙の意味よりもっと、特定のであり、又限定された意味を有することになる。これと同様に「語り」の時間的構造を成り立たせるには、文法範疇の時制だけでなく「語り」もしくは、談話 (discourse) の中での解釈による出来事の前後関係によるのである。松谷みよ子の『赤ちゃんの部屋』を読んで次の様に整理してみることができる。

(i) 過去時制が「語り」の筋すなわち前景 (Foreground)<sup>(4)</sup>を発展させている。この童話の過去形の中には、動詞と過去を示す助動詞との複合した形式 (... た) をとるものと、動詞の動作・作用の進行を表現する上一段の自動詞と合成した形式 (... ていた; でいた) の二種類がある。

この童話では会話でない語り (narration) の部分で使用されている動詞は56個で、その中、36の動詞が過去時制 (波線と星印で示す) であり、20個の動詞が「歴史的現在時制」 (棒線で示す) である。36個の過去を表わす用法の中、動作・作用の進行状態を示す表現 (星印のついた箇所 e. g. 座っていました; 駆けまわっていました; ふっていました; 浮かべていました; くりかえしていました) は5箇所で見られる。この進行形をとる動詞については、その動詞が意味上、動詞 (dynamic) か静的 (static)<sup>(5)</sup>かという動詞の種類とは、ほとんど関係がないようである。この童話の筋を追ってみると過去形 (... た) と過去進行形 (... いた) の両方の過去表現が「語り」の筋をつくり上げている。「歴史的現在時制」で書かれた20の文章を除いても過去時制36の文章と会話だけで、読者は主人公ひろ子が、何をして、どのような結果になったかについて理解できる。

(ii) 「語り」の背景 (Background) となるような場面の説明をする過去時制の機能について述べると、すべての過去時制が話の筋を順序づける糸口としての機能を等しく持っているかという点、そうではない。単なる過去形 (... た) と進行状態を示す過去進行形 (... いた) の間には、差が見られる。これらの進行形は出来事の順次的発展を語るのではなく、人物の状態や周囲の状態を述べているにすぎない。出来事の時間的发展と解釈には係わらないが、他の過去形 (... た) と比べると、「語り」の背景の一部としての機能が強いといえる。「語り」における時間的順序に直接に関与する過去時制と、そうでなく、むしろその過去の時間帯における状況や過程を絵の中の背景 (Background) のように説明する過去進

行状態の二つに区別できよう。

ひろ子は薄暗くなっていく部屋の中に、ぼつんと座っていました。外には冷たく、からからに乾いた風が、うなり声をあげて駆けまわっていました。.....ひろ子はたまらなくこわくなって、隣のゆきちゃんの家にいきました。

『赤ちゃんのお部屋』

「うちにも赤ちゃんいればいいのになあ」  
ひろ子はつぶやきました。風はいよいよ冷たく、暗い空は氷のかけらのような星を浮かべていました。その下で小さなひろ子はひとりぼっちでした。

同上

いつもやさしいおじいさんの一声に、みんな黙りました。  
「なあ、みんな、貧乏人どうした。仲よくするんだぞ」  
くると、朝鮮の子は、後ろをむいて駆けだしました。駆けだしながら朝鮮の子は、泣いていました。

『朝鮮の子』より

「あ、お化けがきた」  
「また、ただ見する気だぞ」  
きゅうに子どもたちが、騒ぎはじめました。  
お化け、といわれたのは、十ぐらいになる女の子でした。髪はぼうぼうで、目ばかり光らせています。背中に赤ん坊をくくりつけてゆすりながら、にこりともしないで、立っているのです。

同上

次に、過去形(... た)をとる表現の中にも、過去進行形と同じように、「語り」の中で背景 (Background) となるものもある。これらは行為・行動を示すのでなくて、進行している状態や過程を述べていて、出来事や行為の時間的順序には、直接寄与してはいないのである。

「うちにも赤ちゃん、いればいいのになあ」  
ひろ子はつぶやきました。風はいよいよ冷たく、暗い空は氷のかけらのような星を浮かべていました。その下で小さなひろ子はひとりぼっちでした。

『赤ちゃんのお部屋』

「おかあさん、うちの、ねんねしている赤ちゃんに、ひろ子、ご本を読んであげるわ」  
ひろ子は、高い声で読みはじめました。

「寒い冬がやってきましたので、お山のうさぎたちは...」  
 おかあさんは、なみだをのみこみながら、ひざによりかかっている、ひろ子の髪を静かになでました。  
 外は、木枯らしでした。

同上

背の低い、小さなうちばかり並んだ町でした。  
 お店にも、あんまり品物が並んでいないような町でした。  
 けれども、どの路地にも、子どもはたくさんいて、すずめのように騒いでいます。

『朝鮮の子より』

これらの過去表現は、B. Comrie (1986: 15) のいう静的な ('static') 状態への言及にとどまっていて、「語り」の筋を発展させるような要因には深く係わっていない。だから筋の発展の外にあると考えてよい。こうしてみると、筋書きを発展させる過去形の間には、状態や過程を伝える過去進行形と「歴史的現在時制」(次の項で触れる)が背景 (Background) としてモザイクのように埋め込まれていると解釈できる。

(iii) 登場人物の中の主人公 (ひろ子) の行為・行動と過去形の選択との間に相関関係が観察される。この童話では、主人公がひろ子であり、語り手は、ひろ子の行動や気持について、読者である子供達にわかりやすく描写しようとしているから、時間的に順序を追うことになり、その結果として、過去形が選ばれるのかもしれない。

「いない、いないよ、ばあ」  
 ゆきちゃんがあやします。  
 「ねえ、あたしにもやらしてえ」  
 そのとき、がらりと戸があきました。あ、ゆきちゃんのおとうさんだ。  
 「おとうさん」  
 ゆきちゃんが駆けだしていきます。ひろ子は、そのまに、急いでおもちゃをふりました。  
 ロンロンロン、リロリロリロ。  
 でも..... もうだめです。ゆきちゃんのおとうさんがきました。  
ひろ子は急いで部屋のすみっこに逃げました。  
 .....  
ひろ子は、もう帰らなくてはいけないのに気がつきました。  
 .....



ひろ子は運動ぐつをつっかけて、外に出ました。

.....  
「うちにも赤ちゃん、いればいいのになあ」  
ひろ子はつぶやきました。風はいよいよ冷たく、暗い空は氷のかけらのよ  
うな星を浮かべていました。その下で小さなひろ子はひとりぼっちでした。

.....  
おとうさんは寂しくないのかしら、ひろ子は、寂しいなあ、  
ひろ子は空を見あげました。.....  
お星さまの中にいないのかしら？  
ひろ子はそこまで考えて、急いで首をふりました。

.....  
赤ちゃんって、どこにいるんだろう、路地から路地へぬけながら、ひろ子  
は考えました。片足で飛びながら考えました。  
「あ、おかあさんにきいてみよう」  
ひろ子の顔が、ぱっと明るくなりました。

.....  
ひろ子は風にむかって、走りだしました。

『赤ちゃんのお部屋』

P. Hopper の言葉を借りれば、ひろ子の行為・行動を示す主なる筋を語っている過去形は、前景化 (Foregrounded) されているといえる。それは、ひろ子の行為・行動は、この童話の骨格であり、全体の「語り」の中で重要な要素であるからである。それは、又、子供達の理解を助けるために、現実の世界での事の起りの順序と一致した時間帯 (event time) で語っている。この前景化された筋に沿って、同時に語られている説明部分 (論評・意見) は、前者を強調し、なお且つ、語り手の主観を述べる背景化された (Backgrounded) 場所といえる。

## II. 現在時制について

次に、現在形が『赤ちゃんのお部屋』と松谷の他の童話の中で、どのように使われているかを観察してみると、次のように、その特徴を挙げることができる。

- (i) 本来の「語り」(narration) の部分と、その「語り」について、語り手が内容を評価したり、あるいは、意見を述べたり、又は語り手の主観を入れるために、「歴史的現在時制」を用いている部分とがある。次に記した下線の箇所では、語り手が自分の「語り」に非常に興味・関心

を抱いて、「語り」の中に、語り手が顔を覗かせている様子がうかがわれるのである。

ひろ子は薄暗くなっていく部屋の中に、ぽつんと座っていました。外には冷たく、からからに乾いた風がうなり声をあげて駆けまわっていました。部屋のすみからは、気味の悪いお化けが、ケラケラ笑いながら出てくるような気がします。

『赤ちゃんのお部屋』

ひろ子は、そのまに、急いておもちゃをふりました。  
ロンロン、リロリロリロ。  
でも………もうだめです。ゆきちゃんのおとうさんがきました。  
ひろ子は急いで、部屋のすみっこに逃げました。

同上

「ねえ、あたしにもやらして」  
ひろ子はふとんのすそから、おずおずといいました。赤ちゃんの小さなこぶしや、ぽうっと赤いほっぺたにさわってみたいのです。ロンロンとおもちゃをふってあやしたい。

同上

「いつもくる紙芝居屋のおじいさんに、チョッキ編んでやりたいの。ただ見ばかりしているんだもの」

毛糸、といっても、ふくふくした新しい毛糸ではありません。かあちゃん  
が買ってくるぼろの中に、まじっている毛糸でした。長さも、三十センチあ  
れば、いいほうです。色もさまざまでした。  
それを拾いだしては、みどりは箱にためました。

『朝鮮の子』より

語り手が評論したり、あるいは云いたい事を表現する目的で「語り」の中で、文体的手段として「歴史的現在形」を取り入れているといえる。こうして、語り手の「語り」に対する姿勢を主観的<sup>(6)</sup>にしているのである。語り手の「語り」の中への主観的係り方は、語り手の優しさ、子供に対する深い同情と思いやりで特徴づけられている。お化けの出現に対する子供の恐怖心、小さくて未知なる物への好奇心、大人に対す遠慮、女性が日常生活で経験したこと——こうした心情を充分理解した上で、語り手の気持を、現在形で「語り」の間に自然に入れている。それは、主人公ひろ子や朝鮮の女の子の気持と見事に同化している。語り手は、

自己の気持ちを過去形の「語り」の中で、「歴史的現在時制」で主張しているといえよう。このように、語り手の主観的表現効果は、過去形と「歴史的現在形」の交替という現象の中に観察されるのである。

- (iii) 時間的、心理的距離を読者に感じさせないために、現在形と過去形の交替がみられる。空間的、時間的、心理的近接感を読者に経験させてくれるような現在形の使い方をしている<sup>(7)</sup>。語り手(松谷みよ子)は、話の筋が赤ちゃんの部屋の描写に移ると、読者(聴き手)である子供達に、より近くで語りたいという願いをこめているかのように、それらの距離を短くするために「歴史的現在形」を用いている。この時制を通して、赤ちゃんの部屋や赤ちゃんの様子を視覚、聴覚そして嗅覚に訴えながら鮮明な印象を、読者に与えるのに成功している。

ひろ子はたまらなくこわくなって、隣のゆきちゃんの家にいきました。

ゆきちゃんは、お部屋のすみっこにある小さなおふとんのそばで、おもちゃのオルゴールをふっていました。そこには赤ちゃんが寝ているのです。

ロンロンロン、リロリロロン。

おもちゃのオルゴールはかわいい音をたてて鳴り、赤ちゃんの真っ黒な目に、おもちゃの赤や桃色や空色が写って、ロロロとゆれます。

ウククーン、ウククーン。

赤ちゃんはきげんよく、お話をしています。

ゆきちゃんのうちは狭いけれど、暖かくって、明るくって、おいしい匂いがしています。ゆきちゃんのおかあさんが台所で、コトコトなにかきざんでいる音もきこえます。

赤ちゃんって、どこにいるんだろう、路地から路地へぬけながら、ひろ子は考えました。片足で飛びながら考えました。

「あ、おかあさんにきいてみよう」

ひろ子の顔が、ぱっと明るくなりました。なあんだ、どうして気がつかなかったのだろう。ひろ子の目の前に、むちむちふとった赤ちゃんが笑っています。

『赤ちゃんのお部屋』

ゆきちゃんの家で見たもの、例えば、可愛い赤ちゃんの様子、色とりどりのおもちゃ、ゆきちゃんが赤ちゃんをあやすこと、ゆきちゃんのおかあさんの夕食の仕度と配膳——これらすべては、ひろ子の欲しいものであり、この願望を子供達に伝えるのに語り手と読者(聴き手)のより親密な接近によって生ずる「語り」の劇的效果をあげなければならない。

その目的のために、時間的隔りの少ない「歴史的現在時制」が使われているとみてよい。参考として松谷の他の童話作品から例を挙げておく。

たった一間のアトリエのまん中にストーブが燃えていて、そのまわりに平井さんや、平井さんの奥さんや、五つになる和子ちゃんがあります。ところがそのまわりを、犬だの、猫だの、うさぎだのが走りまわっているのです。そしてまたそのまわりの檻の中には、さるだの、りすだの、はとだのが、遊んでいました。

そのうちうさぎが、ぴよこたん、ぴよこたん、流しの横のバケツへ水を飲みにいきます。すると猫がまねっこして、また水を飲みにいきます。すると今度は、平井さんがそのバケツから水をくんで、わたしたちに、コーヒーをわかしてくれるのでした。

こんなふうにかわった家でしたが、今度いってみると、また家族がふえて、真っ黒な子猫が走りまわっていました。

『黒猫四代』より

そもそも「語り」とは、過去の出来事を伝えることであり、語り手が発話の行為をする時点（speech time）との関係からすれば、「語り」のために過去時制を使わなければならないわけで、この過去時制は、‘無徴’（unmarked）であると同時にそれは、「語り」の特徴的な時制といえる。更に、「語り」の過去時制の枠の中で「歴史的現在」が頻発するのは、語り手の美学的思想の問題に委ねられたものであろう。一つは、語り手の文体上の時制の無意識な選択が、語り手の位置と出来事の空間的、時間的距離の遠近を関連づけさせることにより「語り」の内容（出来事）に対する語り手の態度、考え、感情を説明できるとすれば、それは、「歴史的現在時制」がその役割の一端を負っているといえる。もう一つは、語り手は自分が語っている話に、個人的に評価や意見を述べて深く係わるために、「歴史的現在時制」は効果があるようである。「歴史的現在時制」によって語り手の立場から経験を組み立て直し、それを他の過去時制と共に機能させることによって主観的效果—美的効果を上げているのである。

日本語の「語り」のテキストにおける現在形の頻度数の多いことについては、日本語の持つ性質の複合的な絡み合いであるという結論は池上嘉彦氏の論文で、すでに明らかにされているが、過去形と現在形の交替は、語り手の任意の選択に委ねられているからこそ、その文体特徴としての機能も重要であるという事実が、松谷みよ子の限られた童話の資料の中から引

き出されたと思う。動詞の時制の役割は、「語り」の時間的構成を筋立てだけでなく、「語り」の中では、他の機能、例えば、文体特徴として取りあげられるような語り手自身の表現手段や美的感覚としての用法も存在するということが、ある程度明らかになった。そして、このことは、逆にいえば、「語り」の時間的構成は動詞の時制だけに依存するのではないということも言える。時間の捉え方の問題は、各作家の感覚に委ねられる傾向が強いので、その作家の美学的考え方にも深い関連性が考えられる。この点については、数多くの資料を集めて、更に検討を進めなければならないので、次の研究課題に入れられなければならない。なお、児童向けの作品については、次の段階として心理学に基いた哲学的な児童の世界観もとりあげて研究されなければならないと思う。

#### 〔註〕

- (1) 池上嘉彦,「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」pp.70—71.,『語り——文化のナラトロジー』記号学研究 6 : 25. 東海大学出版. 例えば, strike at a person よりも strike a person, strike a person よりも strike a person dead の方がそれぞれ動詞の他動性が高い。…… 他動性に関してすでに知られている事柄——すなわち, 現在形よりも過去形, 不完了相よりも完了相の方がそれぞれ他動性が高いと解釈できるということ——からも十分支えを得られる。
- (2) Ibid., p.61.
- (3) B. Comrie, “Tense and time reference: from meaning to interpretation in the chronological structure of a text,” 12—13, *Journal of Literary Semantics* XV/1 (1986) . “I presuppose a general linguistic framework in which there is a clear distinction between the meaning (semantics) of a linguistic item (lexical item, grammatical category, syntactic construction) and the interpretation which that linguistic item receives in context. This is essentially the same as the model outlined by Grice (1975), in which the gap between (in my terminology) meaning and interpretation is mediated by (in Grice’s terminology) conversational implication.”
- (4) P. J. Hopper, “Aspect and foregrounding in discourse,” p.213, *Syntax and Semantics*, Vol. 12 : Discourse and Syntax, “It is evidently a universal of narrative discourse that in any extended text an overt distinction is made between the language of the actual story line and the language of supportive material which does not itself narrate the

main events. I refer to the former — the parts of the narrative which relate events belonging to the skeletal structure of the discourse — as FOREGROUND and the latter as BACKGROUND. . . . . ”

- (5) B. Comrie, 15, 「過去形の動詞の中で時間的順序や筋道に係わる傾向のある語彙とそうでないものを比べると, その違いは, 動的動詞(状態よりむしろ行為・行動・出来事等の状況とその一連の時間的順序を記述するもの)と静的動詞(状態を記述するが一連の時間的順序には関与しない動詞)の区別に相応する。」
- (6) S. Wright, “Tense meanings as styles in fictional narrative,” *Poetics* Vol. 16, No. 1 (1987), 58, “The historic present is an instance of the tense being used to highlight the speaker’s involvement in the story he is presenting. Its subjective effect actually resides in the alternation of past and present forms.”
- (7) Ibid., 56, “... by using the present tense to talk about the past, the speaker presents events as experience that are immediate rather than distant or remote.”

### 参 考 資 料

池上嘉彦

1986 『語り—文化のナラトロジー』記号学研究 6, 日本記号学会編。

松谷みよ子

昭53 『黒い蝶・花びら』講談社文庫。

村上本二郎

昭30 『初歩の国文法』昇龍堂出版。

Comrie, Bernard

1976 *Aspect : an introduction to the study of verbal aspect and related phenomena, Cambridge Textbooks in Linguistics*, C. U. P.

1985 *Tense : Cambridge Textbooks in Linguistics*, C. U. P.

1986 “Tense and Time Reference : from meaning to interpretation in the chronological structure of a text,” *Journal of Literary Semantics* XV/ 1, Julius Groos Verlag.

Crystal, David

1966 “Specification and English tenses,” *Journal of Linguistics*, Vol. 2, No. 1 : 1—33.

Hopper, Paul J.

1979 “Aspect and Foregrounding in Discourse,” *Syntax and Semantics*, Vol.12, pp.213—240.

Schiffrin, Deborah

1981 “Tense Variation in Narration,” *Language*, Vol.57, No. 1 : 45—62.



Wolfson, Nessa

1979 "The Conversational Historical Present Alternation," *Language*,  
Vol.55, No. 1 : 168—182.

Wright, Susan, "Tense meanings as styles in fictional narrative," *Poetics*,  
Vol.16, No. 1 : 53—73.

### 朝鮮の子

背の低い、小さなうちばかり並んだ町でした。

お店にも、あんまり品物が並んでいないような町でした。

けれど、どの路地にも、子どもはたくさんいて、すずめのように騒いで  
います。

カチ、カチ、カチ。

カチ、カチ、カチ。

「わあい、紙芝居だぞう」

はしっこい子は、紙芝居屋のおじいさんから拍子木<sup>ひょうしき</sup>をもぎとって、

カチ、カチ、カチ」

と、自慢そうにたたいてあるきます。

「よこせよ」

「ちょっと、かせよ」

もうけんかが\*始まっていた。拍木子のとりっくらです。

「これこれ、けんかをするんじゃないよ」

<sup>あめ</sup>飴を売りながら、紙芝居屋のおじいさんがいいます。白髪<sup>しら</sup>の、やさしい  
おじいさんでした。

おじいさんは、工場でけがをしたために、やめさせられて、紙芝居屋に  
なったのでした。

「あ、お化けがきた」

「また、ただ見する気だぞ」

きゅうに子どもたちが、騒ぎ<sup>さわぎ</sup>はじまりました。

お化け、といわれたのは、十ぐらいになる女の子でした。髪はぼうぼう  
で、目ばかり光らせています。背中に赤ん坊をくくりつけてゆすりながら、  
にこりもしないで、\*立っているのです。

朝鮮人、朝鮮人と



ばかにする

わたし朝鮮人、とこわるい

いちばんいたずらっ子が叫びました。わあい、みんな叫びました。その子は、朝鮮人だったのです。

「こらっ」

おじいさんが、いきなり怒鳴りました。

子どもたちは、きゅうにしいんとして、ぼかんと口をあけ、おじいさんを見あげました。

「あの子がお化けなら、おまえたちは二つ目小僧だぞ。あの子が朝鮮人なら、おまえたちは日本人じゃないか。弱い者いじめは、ひきょうだぞ」

いつもやさしいおじいさんの一声に、みんな黙りました。

「なあ、みんな、貧乏人どうした。仲よくするんだぞ」

くるり、と、朝鮮の子は、後ろをむいて駆けだしました。駆けだしながら、朝鮮の子は、\*泣いていました。

「かあちゃん、この毛糸くれるかい？」

「ああ、なにすんだい」

ぼろをよりわけているかあちゃんが、いいました。

床が地面とすれすれの、掘っ立て小屋でした。朝鮮の子は、名まえをみどりといいました。日本で生まれて、日本で育ったのです。

「いつもくる紙芝居屋のおじいさんに、チョッキ編んでやりたいの。ただ見ばかりしているんだもの」

毛糸、といっても、ふくふくした新しい毛糸ではありません。かあちゃんを買ってくるぼろの中に、まじっている毛糸でした。長さも、三十センチあれば、いいほうです。色もさまざまでした。それを拾いだしては、みどりは箱にためました。

つゆがきました。

雨の降る日は、かあちゃんは、仕事にでられません。雨がつづく、かあちゃんも、みどりも、弟も、なんにも食べずにいなくてはなりませんでした。

みどりは、暗い部屋で、せっせとチョッキを編みました。おなかがすい

ているのを忘れようと、小さな手でせっせと編みました。

ピシャピシャ、雨は地面をたたきます。すずめもびっしょりぬれたのでしょう。ツューツューと、声までぬれているように鳴きました。

「かあちゃん、紙芝居屋のおじいさんも、仕事にでられなくて、困っているだろうね」

みどりは、空を見あげていました。おじいさん、待ってくれ、いまにチョッキをあげるよ。みどりは心の中でいったのです。

半年かかって、チョッキができあがりました。もう木枯らしが吹き、紙くずをくるくる巻きあげている冬でした。

恥ずかしそうに、おじいさんの手の中に、みどりはチョッキを押しこみました。

「おじいさん、これ、あげる。わたしが編んだの。へんなのだけど——」

「おお、おお、ありがとうよ」

おじいさんの目には、涙がいっぱいでした。

それから八年たちました。

大きな箱を、後ろにつけて、自転車を走らせているのは、みどりです。

もうみどりは、ほったの赤い、美しい娘です。ぼうぼうだった髪を、きちんと三つ編みに結って、口をきりりと結んでいました。

「よおう、女の紙芝居屋、しっかりやれえ」

だれかがひやかしました。でもみどりはふりむきもしません。さわやかな秋晴れです。

おしめがハタハタと鳴るトンネル長屋の前で、みどりは自転車から飛びおりました。紙芝居屋も寄りつかない、貧しいところだったのです。

カチ、カチ、カチ。

拍木子は、澄んだ音をたてて鳴りました。

わあい、すずめのように元気に、子どもが飛びだしてきました。飴を買う子は、あまりいません。おねえちゃん、おねえちゃんと、小さな子がすりよってきます。

「さあ、紙芝居やるまえに、みんなで歌をうたおうね」

みどりがにこにこして見まわすと、みんな、うんと、いっせいにこっくりします。

「さあ、いいかい？」

“ぼくらは仲よし  
元気な 子ども  
いつも 明るく 暮らしましょ  
口笛吹いて らんらんらんらん”

うたっている子どもたちの、真っ黒な、きれいな目を見ていると、みどりは、小さいときのことや、あのやさしいおじいさんが、思い出されてなりません。

貧乏に負けないで、さあ、うたおうね。

“口笛え吹いて らんらんらんらん”

青空に突きぬけそうな子どもたちの歌声でした。

#### 黒猫四代

その一、一ぴきの猫と、二頭のぞう

「この黒い子猫を、もらってくれないか」

と、絵かきの平井さんにたのまれたのは、わたしたちが結婚して一月とたたない、ある冬の日のことでした。

平井さんのうちは、まったく愉快的家です。

たった一間のアトリエのまん中にストーブが燃えていて、そのまわりに平井さんや、平井さんの奥さんや、五つになる和子ちゃんがいます。ところがそのまたまわりを、犬だの、猫だの、うさぎだのが走りまわっているのです。そしてまたそのまわりの檻<sup>おり</sup>の中には、さるだの、りすだの、はとだのが、遊んでいました。

そのうちうさぎが、ぴよこたん、ぴよこたん、流しの横のバケツへ水を飲みにいきます。すると猫がまねっこして、また水を飲みにいきます。すると今度は、平井さんがそのバケツから水をくんで、わたしたちに、コー

ヒーをわかしてくれるのでした。

こんなふうにかわった家でしたが、今度いってみると、また家族がふえて、真っ黒な子猫が走りまわっていました。どこからどこまで石炭のようにつやつやと真っ黒で、ただ目だけが、エメラルドという宝石をはめこんだように美しい緑色です。

「この猫なんだがね、ものすごい大食いで、前からいる猫をいじめてしようがないんだ。ひとつもらってくれないか、家に猫がいるというのは、食卓に花があるようなものだというのが、きみ、いいもんだぜ。それに、直子さんはからだが弱いだろう。黒猫は、病気の守り神だよ」

平井さんにすすめられて、わたしたちも、とうとうその気になりましたが、いざ箱に入れて連れて帰ろうというときになって、困ったことになりました。和子ちゃんがしっかり抱きしめて、はなさないのです。見れば、涙までためています。これには弱って、とうとうその日はそのまま帰りました。

それから二、三日すると、わたしは平井さんへ出かけていって、和子ちゃんをつかまえました。

「ねえ和子ちゃん、おねえちゃん、あの黒い猫が大好きなの、ちょうだいね」

和子ちゃんは、いやいやしました。

「かわりにね、ぞうさんをあげる、それでもいや？」

「ぞうさん、て、あのお鼻の長いぞうさん？」

「そうよ、あのぞうさんを二頭あげるから、この黒猫と、とりかえっこしましょうよ」

「ん」

和子ちゃんはぞうが気に入ったらしく、やっどこっくりしました。わたしは、そこで、猫を入れるためにもってきた箱を出しました。

「はい、この中に、ぞうさんがいまあす」

和子ちゃんは、ふしぎそうに箱をあけてみました。箱の中には、箱がまたあって、赤いリボンがかかっています。その箱をあけた和子ちゃんは、うれしそうに叫びました。

「うわあい、ぞんさん、ぞうさん、チョコレートのぞうさんが、二つだわ！」

こうして、黒い子猫は、わたしの家の猫になりました。名まえをタロウ

とつけました。タロウは、家へ着くとさっそく、おなべのふたをあけて首  
をつっこみ、食いしん坊のところを見せました。